

用語について（II）

山口青邨

次に漢字に就て少し述べて見たい。

日本文は漢字、假名まじりといふことになってゐる、ところが漢字はむづかしくて、覺えるのに容易でない、漢字が無制限にあることはいろいろの點で不便である、それから起る損失が大きい——といふ理由で、むかしから漢字を減らさうとする運動があつた。

終戦後、常用漢字といふものが決められ、一八五〇字が選定され、公文書、新聞にはこの枠内で使はれて来た、ところが過去五年の経験によつて、一八五〇字では不便があることがわかつて、この頃またその補正をしようといふ議が起つてゐる。

そこで俳句と漢字といふことであるが、俳句は詩であるから、これは例外としてさういふ常用漢字などに制限されることはいらないことになつてゐる、だから、もし必要ならどんなむづかしい字を使つてもよい。私なども巉巖といふやうな字や、熙々といふやうな字を使つてゐる、何故かういふむづかしい字を使ふかといふと、どうしてもかういふ字、又は熟語を使はないと氣持が出ないからである。岩がごつごつとそそりたつ感じが巉巖といふ字で、説明しなくてもよくそれが出るからである。又、熙々といふことによつて、春の日がうらうらと、かがやかに照る状態がよく現はれるからである。

これは一つの武器だと思へばよい。

山口青邨著『俳句入門』より抜粋